

小県郡真田町陣の岩岩陰遺跡の出土遺物

綿田 弘 実

一 はしがき

陣の岩岩陰遺跡は小県郡真田町十ノ原、菅平高原に所在する。四阿山から噴出した塊状溶岩流末端が剝離して形成された岸壁群のうち、中之沢左岸の急峻な斜面の岸壁にある。標高は約一四〇〇^{メートル}、南西に面し神川の溪谷を隔てて上田市街地を遠望できる場所である(図1)。本遺跡は菅平洞窟遺跡群の分布調査により一九六四年(昭和三九)に発見され、予備調査を経て翌翌年に学術発掘調査が実施された。出土遺物は当時坂城高校教諭であった丸山敏一郎が地歴部の生徒を指導しながら整理し、一九六八年に調査概要を報告した。その後遺物の散逸防止と展示に活用するため、須坂市立博物館に保管されてきた。

この度、より一層の活用を図るため、資料の保管責任者であった樋口昇一の名前で、真田町唐沢岩陰遺跡の出土遺物とともに一括して当館に寄贈された。本稿では、発掘から三五年を経ているため、概要報告に基づいて発掘調査所見の概略を記し、寄贈後に接合が進んだ土器を中心に資料提示する。

二 発掘調査の概要

本遺跡は一九六四年一月、高橋桂・藤沢平治により確認された。翌年一月と翌翌年五月に予備調査をおこない、同年の夏期休暇中八月三日から七日の五日間、永峯光一を調査責任者として発掘調査を実施した。調査には樋口・岩野見

司・磯崎正彦・高橋・藤沢・丸山・関孝一・松沢芳宏らが参加した。

岩陰は開口部の幅約一四^{メートル}、奥行五^{メートル}、底線の高さ約八^{メートル}を測る。テラスには底から落下した大小多数の岩塊の間に土砂が落ち込み、岩陰東側にも岩塊・土砂の堆積がある(図2)。発掘は岩陰内部の奥壁からテラスまで一・五^{メートル}幅のトレンチ(第1〜第5)を設定し、各トレンチは図2のA―Cラインの外側を二^{メートル}毎に区切って一区・二区とし、残りの部分を三区、奥壁側を内区とした。第五トレンチと内区奥壁寄りの半分は排水路として発掘していない。遺物の注記は、例えば第三トレンチ一区二層の場合「3-1-2」のように記されている。

岩陰内には奥壁の亀裂から湧き出した水たまりがあったが、大きな落盤もなく土層の堆積状況は明確に観察できた。表土の一層からは寛永通宝などが出土し、一〇層は岩盤である。二層の黒色土は堆積が厚く、多量の弥生中・後期土器と獣骨などを出土した。三・四層は堆積が薄く少量の縄文土器と石器を出土、四層と同レベルでテラスに分布する五層からは、やや多量の縄文前・中・後期の遺物が出土した。六・七層は層厚が薄く縄文前・中期土器少量、八層はブロックをなす灰層で縄文早・前期土器片と多量の焼獣骨片、骨角器などを含んでいた。九層は岩盤が剝離した板状礫が主体で、縄文早・前期の土器数片を出土した。

遺跡の現状は、岩陰前面に繁茂した植物が視界を遮り、テラスの前方には発掘時の廃土と思われる黒色土が積もっている。調査部分は窪地となっているが、板状礫が積み重なってさほど草も生えていない。平面図に記録された四個の石も確認でき、奥壁からは湧水が流出している(写真)。周辺はカラマツの人工林であるが、落盤が折り重なって土壌の乏しい岩陰前方は植林されず、岩壁上部にはア

カマツやシラカバが成育している。

三 遺 物

寄贈された遺物量は整理用平箱に破片を重ねずに収納して二五箱前後ある。内訳は縄文土器（早～晩期）、弥生土器（中・後期）、古墳・平安時代土器、石器（石皿・磨石・磨製石斧）、銅剣、獣骨・人骨である。このうち銅剣は國學院大学考古学資料館所蔵となっていたため、レプリカが寄贈された。概報に図示された石器や銅剣は重複を避け、縄文・弥生土器を中心に紹介する。少数の種については点数あるいは個体数を記した。紙数の都合から、今回図示した資料は縄文・弥生土器の二〇パーセント程度である。

縄文土器 (図3・4・6)

第一群 縄文早期土器群 (1～12)

第一種 押型文土器 (1～5) 5点。三个体程度。横位施文の山形文 (1) と楕円文 (2) があり、細久保式である。2 は楕円文が斜位に施文される部分がある。3・4 は楕円文に複合鋸歯文が併用され、塞ノ神式である。5 は捺糸文と縄文を併施文するが、この種に伴うと推定されている。

第二種 条痕文土器 (6～12) 6 は黒褐色の粗粒砂の多い胎土で、横位区画内に斜位沈線文を充填している。湯倉洞窟第九群第七類に類するものであろう。

7～10 は繊維を少量含む薄手の土器である。内外面に細かい条痕を施し、口縁部から胴上半部に細隆起線で梯子状などの意匠を描く。楕木1式に類似する。

11・12 は器壁が厚く、12 は斜位に浅い結節沈線文を施す。

第二群 縄文前期土器群 (13～23)

第一種 前期初頭 (13～16) 二个体程度。矢羽根状の捺糸文13は塚田・中道式、側面圧痕14は花積下層式である。縄文施文土器のうち、厚手で繊維を多く含む横位羽状縄文15・16は本種に伴うものであろう。

第二種 前期中葉 (17～23・25) 末端のループ文18、コンパス文17は関山式で、二个体程度。21は外反する四山波状口縁の小形土器で、丈の低い器形と推定される。口縁部と頸部には半截竹管による刺突列がめぐり、以下は0段多条「凹」による羽状縄文を施す。少量の繊維を含む縄文施文土器は多数認められる。単節「R・R」による横位羽状 (19・20)、附加条 (23・25) 等が見られる。これらはいずれも黒浜式並行期に属す。

第三種 前期後葉 (24・26～34) 24は浮線文を施す土器、26～28は多条の平行沈線を施す土器で、諸磯b式の中頃から新しい段階である。29は波状口縁、30は同一個体の胴部である。諸磯b式と共通の浮線文によりレンズ状の意匠を描き、円形竹管文を施す。同式にはこのような口縁部形態は見られない。結節浮線文32は下島式である。繊維を含まない縄文施文土器は比較的多く、斜縄文 (31・33・34) がみられる。大部分は諸磯b式に属す。

第四種 前期末葉 (35～38) 35は波状口縁下に集合沈線で渦巻や紡錘形を描く。36・37は結節浮線・半隆起線による意匠の隙間をレンズ状や三角状に陰刻する。38は縄文地に幅広の結節浮線を伴う。晴ヶ峯式期の土器である。

第三群 縄文中期土器群 (39～46・131～133)

第一種 中期初頭 (39・40) 三个体程度。雲母が目立つ胎土で、半截竹管による沈線で縦位構成の文様を描く。五領ヶ台式である。

第二種 中期中葉 (41) 一個体のみ。口縁部のU字状隆帯区画内に三叉文を配する。勝坂式でも井戸尻式の段階であらう。

第三種 中期後葉 (42～46・131・132) 八個体以上。すべて唐草文系土器Ⅱ・Ⅲ段階に属す。42・131は樽形深鉢である。131は厚手のつくりで、全体の三分の一程度が遺存し、高さ三五センチ以上、推定胴部径約三〇センチを測る。口縁部に一對の把手が立ち、この間に渦巻文をもつ突起がある。横走隆帯が無文部を画し、中間位置には突出した小渦巻文を配す。把手及び突起下で垂下隆帯が器面を四区分し、この区画に圧痕隆帯を伴う大柄の唐草意匠が展開する。42は口縁部に渦巻文を配して楕円区画が巡るらしい。132は頸部がくびれる深鉢で、把手下から渦巻文が垂

下して胴部文様に連なり、頸部の横位区画には連続刺突列と交互刺突文が沿っている。44は隆帯区画内に沈線文が描かれる。43は小形の鉢形土器のようで、剣先文と繊細な沈線地文を描く。45・46は佐久地方に多い土器である。

第四種 中期末葉(133) 加曾利EⅢ式の両耳壺で、一個体が三分の一度程度遺存した。胴下半部に蛇行沈線や逆U字文を描き、無節縄文rを条が縦走するように施文する。推定口径二六センチメートルを測り、この種では中形である。

第四群 縄文後期土器群(47～60)

第一種 後期前葉(47～54) 堀之内2式の有文土器である。47・52は朝顔形深鉢、51は鉢の胴下部と思われる。48～50・53・54は注口土器である。胴部48～50・53には渦巻文、楕円文、帯縄文、沈線斜行文などの意匠を描く。54は靴籠状把手で、50と同一個体と思われる。推定個体数は深鉢六・鉢一・注口土器五個体以上を数える。

第二種 後期中葉(55～57・134) 四個体程度。加曾利BⅠ式の精製深鉢である。55は沈線帯を段落とし、56は縄文帯が巡り内面文をもつ。57は波状口縁を呈する外面無文の鉢。いずれも口唇部に刻みを施す。134は三単位把手の深鉢である。胴上半に幅狭の平行線化した磨消縄文帯を描き、把手下には「の」字の単位文を配す。口縁部内面に段を有し、太い沈線帯が巡る。

第三種 無文土器及び底部(58～60) 粗製土器であり時期は確実ではないが、第一・二種に伴う可能性が高い。60は唯一の深鉢で、器厚五センチメートル前後、外面にナデ調整を施す。底部には注口土器もあり、細かな網代痕が見られる。

第五群 縄文晩期(61～63) 61は細密条痕を施す。63は横位条痕を施し、口唇部を連続的に押圧している。水Ⅰ・Ⅱ式である。

弥生土器(図4～6)

第一群 弥生中期中葉(64～74・135・136) 栗林式以前の土器。135は口径二二センチメートル・推定高二五センチメートル程度の甕である。外反する口縁部は端部を面取りして縄文を施し、調整を加えていない。櫛歯状工具により向かって左から右へ最大七本の

縦位羽状条痕を施す。胴部には同じ条痕で横線文を施し、施文の断絶点が見られない。それ以下は細かなハケメ調整である。内面に炭化物の付着が著しい。68は同種の口縁部である。136は推定口径一四センチメートルの小形の甕である。口唇を刻み、胴部中位まで縦位の条痕文を施し、三条単位の条痕で山形文・波状文を巡らせる。64～66は縦線文、69は胴下部に半円文を描く甕、70～74は壺である。これらは伊勢宮式に比定される。

第二群 弥生中期後半(75～88) 栗林式土器。75～84は櫛描文を施す甕で、口縁部形態はすべて外反する単純口縁である。口唇端部に縄文(75・76・84)や刻み(83)を加える。櫛描文は頸部は横位(82・83)、横位波状(84)など、胴部は縦(77・79・81・82)または横方向(75・76・78・80)の羽状に施され、列点がめぐるもの(78・79)もある。壺は少数認められ、85は列点がめぐる頸部、86は櫛描文、87・88は沈線文を施す胴部である。甕82～84・壺88は栗林式中段階新相に属すが、その他はいずれも古段階から中段階古相までの古い時期にまとまるものである。

第三群 弥生後期(89～128・137～141) すべての出土土器中で最多数を占める。

89は吉田式の甕、90は壺で、出土量は少い。91～126は櫛描文を施す甕である。口縁部は通常の箱清水式より長めの102・104・105・137が見られる。口縁部は箱清水式に通有の棒状を呈する91～95のほか、わずかに内湾する98～101、折返し口縁102・103、端部が尖るもの96・104・111、面取りした部分にナデを施した後櫛描文を施す108～110などが含まれる。これらの口縁部形態は樽式土器に見られる特徴である。いずれも頸部の簾状文を挟んで波状文を施すが、胴部中位に及ばない114などが主体である。簾状文には三連止め(118・119)二連止め(105・115・117)、等連止め(121)があるが、多単位施文する113も見られる。122～124・139は無文部にハケメを残しており、佐久地方に見られるものである。126は台付甕であろう。その他赤彩の壺と鉢(141)、赤彩のない鉢(140)各一個体ほどがある。これらは大部分は弥生後期を六期区分した場合の第三期、箱清水式土器が成立した時期に属するものである。赤彩壺(127)と法仏系有段口縁壺(128)は終末期に属す。

古墳時代土器 (図5)

129は甕の単純口縁である。図化できる資料は少ないが、入念なヘラミガキや細かいハケメ調整を施す甕の破片は一箱弱程度出土している。弥生後期土器の底部破片と明確には識別できないが、大部分は古墳時代前期・中期の土師器と推定される。

古代土器 (図5・6)

平安時代の土器である。甕は一個体あり、142は肩部から上をロクロナデ、下をタテヘラケズリし、内面にハケメを施した北信に多い甕である。130は灰釉陶器碗で、大原2号窯式に比定される。143は素焼の小形杯で、底部は厚い。口縁内面に煤が付着し、灯明皿と推定される。時期は不明確である。

獣骨・人骨

整理箱に二箱分ほどがある。弥生中・後期土器を多量に出土した第二層黒色土からは保存のよくない獣骨、縄文早・前期土器を出土した第八層灰層からは保存のよい焼けた獣骨が出土したと報告されている。注記がないためいずれの土層か識別できず、一括して獣骨を同定した。獣骨はニホンシカが最も多く、イノシシがこれに次ぎ、カモシカは少量であった。他にヒキガエル、ツノガイを含む貝がある。人骨は頭骨二片と下顎前臼歯一点である。

四 おわりに

真田町では今日洞窟・岩陰遺跡は一〇カ所前後が知られ、この種の遺跡が多い上信火山帯の中でも群を抜いている。とりわけ本遺跡は、約三ノ川西に位置する唐沢岩陰遺跡と並んで学術発掘され、豊富な遺物を出土した岩陰として双璧をなしている。今回提示した資料に関する成果と課題にふれて、まとめに替える。

縄文土器について 第一群7〜10が槻木1式とすれば、県内には例がない。第二群21は少数が広域分布する器種である。同29は諸磯B式としては異色である。

第三群131の口縁部隆帯の小渦巻突起は新潟県の土器装飾に通じ、同43は新潟県が本場である。平野部の集落でも少数または例のないこれらの存在は、山岳地帯を通じた広域交流を物語る可能性がある。洞窟遺跡で縄文中期土器が乏しい傾向は顕著であるが、第三群がまとまって出土した点は本遺跡の特色とされ、初めて図示された。また第四群第一種は少量ではあるが、有文精製土器を主体に注口土器の比率が高い組成は、高山村湯倉洞窟と共通する。運搬の難易に起因する即物的な要因があるうが、注口土器の多さと鉢の欠落には別の理由を探る必要がある。

弥生土器について 第一群はいまだ集落の調査例が乏しく希少な資料である。第二群は平野部で集落が拡大する以前の段階にまともる。第三群は後期中頃にまともり、銅剣はこの時期の所産であろう。長野盆地の箱清水式土器を上回って、群馬県渋川市周辺に分布の中心をもつ樽式土器が出土している。佐久方面を介するより、直接吾妻溪谷を通じた交流が予想される。北陸東部の法仏系は平野部でも少ない。甕形土器の占有率の高さはつとに指摘されているとおりで、壺・鉢をわずかに見いだせたものの、高杯は皆無であった。甕の必需性は自明のこととしても、壺と小型・赤彩器種の欠落の理由は明らかではない。

縄文・弥生土器以外では、初めて獣骨の内容を紹介することとなった。二時期の資料が区別できなかったことは残念であったが、人骨が含まれていたことは遺跡の性格を考える上で看過できない。

農耕社会に入った後の専門的な狩猟民の存在を含め、山住みの生活の解明を目的とした学術調査による出土遺物を紹介した。浅学ゆえ概報の所見・考察を追認するに過ぎないが、拙稿がわずかも資料の全体像を明らかにできれば幸いである。松代群発地震のさなか、私費を投じて学術発掘を敢行された関係者、及び資料寄贈者に改めて敬意を表するものである。

- 1 真田町教育委員会『真田町の遺跡―遺跡詳細分布調査報告書』二〇〇〇年。
 - 2 真田町誌刊行会『真田町誌 歴史編上』一九九八年。
 - 3 菅平研究会『菅平の古代文化』一九七〇年。
 - 4 高山村教育委員会『湯倉洞窟』二〇〇一年。
 - 5 日本考古学協会洞窟遺跡調査特別委員会『日本の洞窟遺跡』一九六七年。
 - 6 樋口昇一『唐沢岩陰遺跡』（長野県史考古資料編 全一卷（二）主要遺跡（北・東信）一九八二年）。
 - 7 丸山敏一郎『菅平洞窟遺跡（陣の岩遺跡）予備調査略報』（信濃考古）一六、一九六六年）。
 - 8 丸山敏一郎『菅平陣の岩遺跡について』（信濃考古）一七・一八、一九六七年）。
 - 9 丸山敏一郎『長野県菅平陣の岩岩陰遺跡調査概報』（信濃）Ⅲ・二〇―五、一九六八年）。
 - 10 丸山敏一郎『陣の岩岩陰遺跡』（長野県史考古資料編）全一卷（二）主要遺跡（北・東信）一九八二年）。
 - 11 長野県考古学会弥生部会『九九シンポジウム長野県の弥生土器編年発表要旨』一九九九年。
- 〔付記〕資料の受贈及び本稿をまとめるに当たっては、多くの皆様の御世話になった。末筆ながら記して感謝の意を申し述べる（五十音順、敬称略）。
- 市川隆之、臼居直之、金井正三、金子浩昌、小林宇彦、小林裕、関孝一、千葉剛成、永峯光一、費田明、蜂屋孝之、樋口昇一、広田和穂、丸山敏一郎、百瀬忠幸、百瀬長秀、矢澤健太郎、須坂市立博物館、湯倉洞窟発掘調査団。
- 今回報告した資料は筆者が図化作業等をおこない、堀内規矩雄（考古資料課長）、上田久仁子、風間春芳、片岡務、宮脇正実、米沢寿美子が携わった。
- 諸般の事情から、実測可能な個体についても拓本図を掲載せざるを得なかったものがある。また定量的な資料提示ができなかった。これらについては別の機会に補いたい。

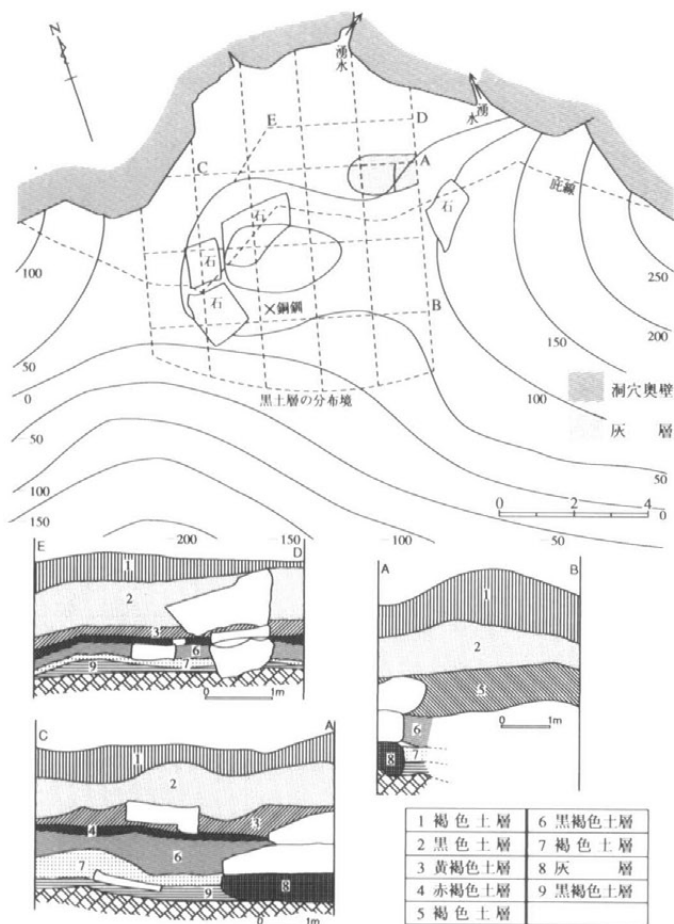


図2 陣の岩岩陰遺跡、平面及びトレンチ断面（文献9に加筆）



陣の岩岩陰遺跡現況（西から）



図1 真田町洞窟・岩陰遺跡分布図
（1：90000、文献1に加筆）

- 29 唐沢第4洞穴 45 唐沢岩陰 46 唐沢第2洞穴
61 陣の岩岩陰 62 前熊久保岩陰 67 大明神洞窟

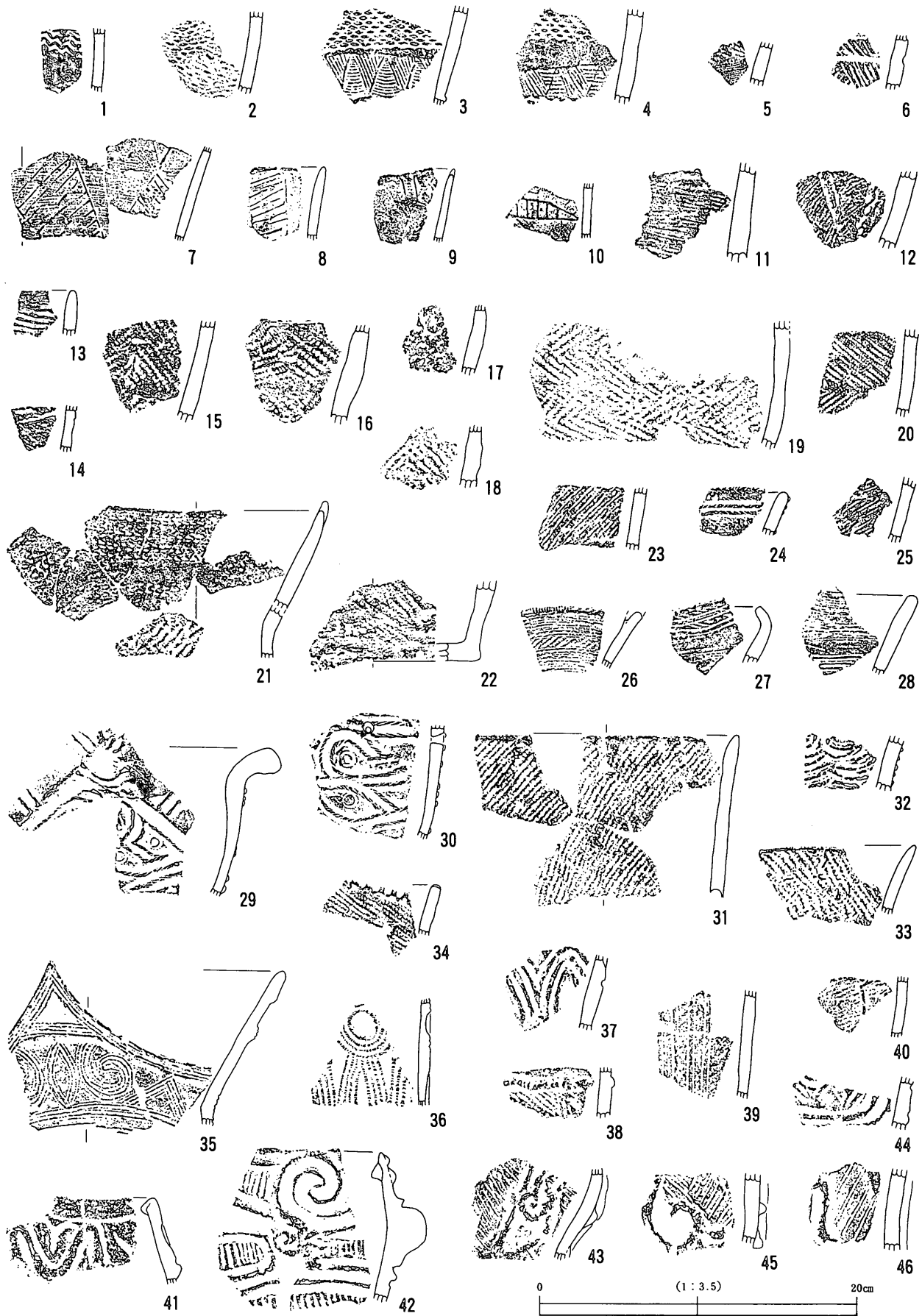


図3 陣の岩岩陰跡出土土器(1)

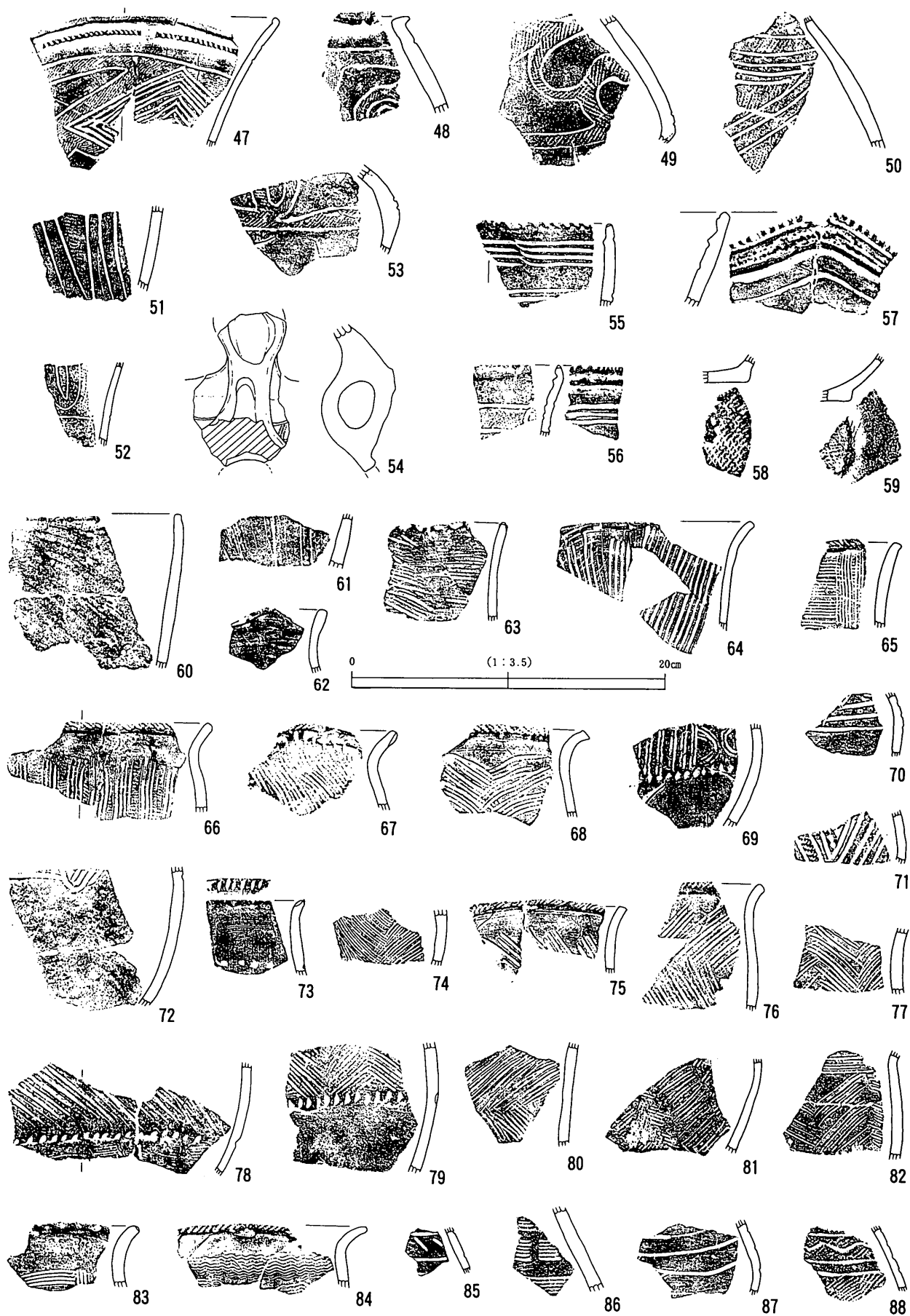


図4 陣の岩岩陰遺跡出土土器(2)

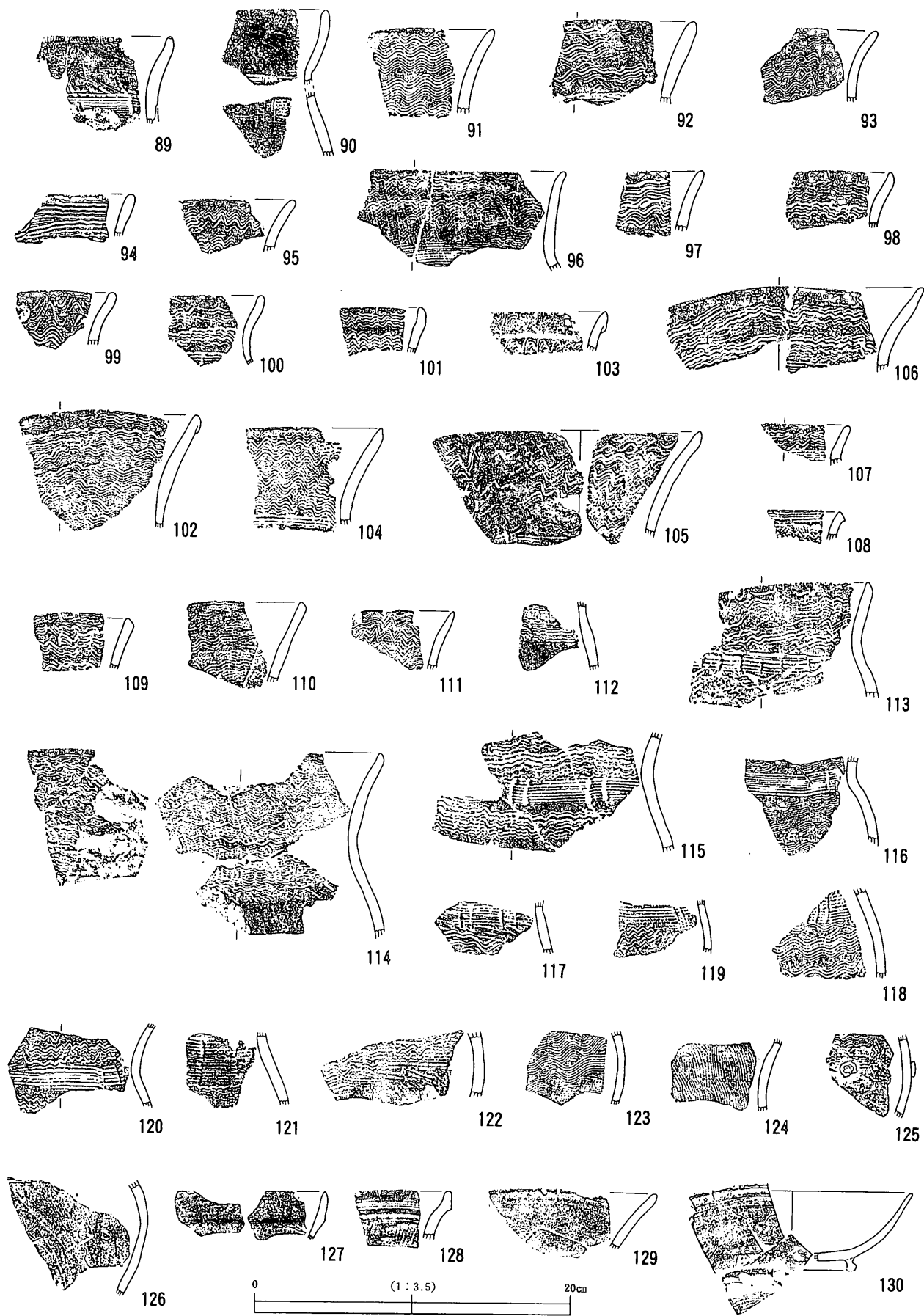


図5 陣の岩岩陰辺跡出土土器(3)

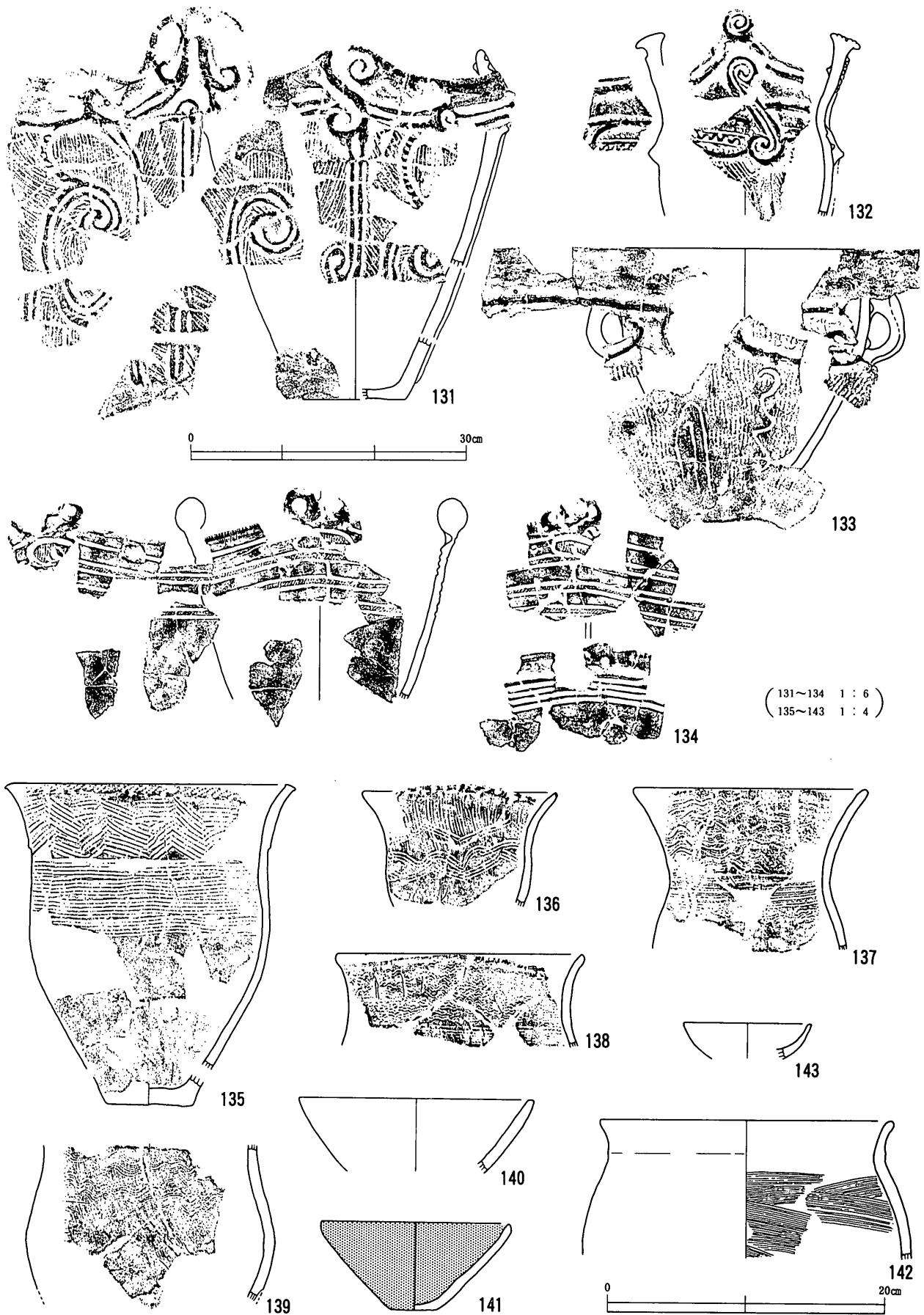


図6 陣の岩岩陰遺跡出土土器(4)